

かなり長い間頭を垂れて合掌していた長門五十次が、口中でブツブツと念仏のようなものを誦えながら軀を引いたので、矢張りその傍らに蹲踞み込んで検死をしていた木下圀治の歪んだ顔が見えた。

長長と横たわっている屍体は女である。殺害される際に激しく抵抗したであろうことは、その不自然に折れ曲がった姿勢からも、悉く散乱した夜具などの状況からも歴然と知れた。無残な散である。

緋色の長襦袢は腰の辺りまで捲れ上り、弾力を失った白くて長い脚が二本、畳の上になやうと伸びている。纏足でもされたかのようにその爪先は萎縮しているが、右の親指のみがやけに反り返っていた。

どうにも艶めかしくて、そこだけ切って貼ったように風景から浮いている。裾くらい直してやつても罰は当たるまい——と、木場修太郎は思った。

被害者は素人女ではあるまい。状況や身嗜みなどから推し量れば娼婦の類だろう。仮令そうでなかったにしろ、連込宿の離れ座敷で殺害されている以上いづれ仔細有りであることに違いはなからう。そんなことを木場は考えている。すると余計に白い脚が目についた。部屋中が燻んでいる所為もある。

それにしても木下も鑑識も一向に裾を直してやる気配はない。木場は、写真を撮ったのだからもう良からうにと半ば弁解でもするように独白を云い乍ら、遺骸に近寄り裾を直した。木下はその仕草を見つつ、浅黒い狸のような顔を引き攣らせて、先輩こいつは又そろ奴さんの仕業ですぜ、可哀想にと、如何にも刑事らしい口調で云った。木場と入れ違いに立ち上がった長門はそれを聞くと、鈍鈍とした動作で振り返り、矢張り鈍鈍とした口調で、

「解剖や何かが済むまでは軽はずみなことを云うものではないですよ罔さん。いやいや、解決するまで下手人は判らないのですから。予断は禁物です」

と云った。木下は口答えをせずに木場の方を向き、余計に顔を歪ませた。意見を求めている。しかし木場はそれを無視して再び死体の脚の爪を眺めた。

長門が——馬鹿がつく程——慎重な刑事であることは木場とて常日頃から百も承知だが、今回ばかりはその慎重極まる発言も茶番にしか聞こえない。慥かに、手口を真似た別人の犯行である可能性もあるし、偶然と云うこともあり得る。だから今の段階で断言し切れないことに違いはない。違いはないが、

——矢張り奴だろうな。

木場もそう思う。

——同じだ。

木場は死体の爪先から徐徐に視線を上げる。腰から胸、そして頸。顔。だらしなく開いた口から覗く小さな歯。形の良い鼻、そして——眼だ。

被害者の両眼は——潰されていた。

瞳のあるべき場所にはぼっかりと穴が穿たれている。皮膚は変色し収縮して盛り上がり、血が黒く凝固してそれを縁取っている。元の人相が判らない。解剖してみないと特定はできないが、多分凶器は彫金の細工などに使う、先の細い鑿である。

——奴の得物だ。

奴——連続殺人の容疑で全国に指名手配されている平野祐吉のことである。

多分、同じ手口だ。

——四人目だな。

木場は大儀そうに立ち上がった。遺体を搬出するらしい。所轄の刑事が寄って来て眼を剥き、こりや例の眼潰し魔でしょうな矢つ張り、と云った。『目潰し魔』とは新聞が平野につけた渾名である。

木場は長門を横目で見て、当てつけるように云った。

「さあな。解剖でもしてみなきやあ判るまいよ。ただ、べたべた指紋やら何やら残ってるから、いづれ難しい事件じゃねえだろ。なあおっさん」

「事件はね、難しいとか簡単とか、そう云う物差しで測ってはいけませんよ修さん——」
長門は矢張り緩慢な調子で答えた。

「——それに、今回は前の三件と頭かに違っているでしょう。これが平野の犯行だとしたら、平野以外にもうひとり現場に居たのか、或は——」

「おい。何で判る」

「それはもう修さんだつて判ってるでしょう——」

老刑事はそう云つて冴えない顔を向けた。

「——被害者、情交の跡があつたでしょう。修さんも今観ていたじゃないですか」

「ああ——」

木場は裾を直しただけである。

「ほら、桜紙だつて鑑識が拾つて行つた。被害者は情事の後に殺されたんです。平野は今まで一度も被害者を陵辱していませんからね。今回に限りと云うのはどうも戴けないですな」

——観るところは観ているなこの親爺。

木場は感心する。年の功とはこのことである。

「生憎俺は仏さんの股座覗くような趣味はねえから、そんなものは見やしねえ——」

気がつかねえよと木場が毒突くと、長門は冗談と受け取ったものか、独身にご婦人の白い御み脚は目の毒ですからねえ、と云った。木場にとってそれは半ば真実である。そこに青木文蔵が戻って来た。

「ああ、どうやら目撃証言が採れました」

「どうやらつてのは何だ」

「はあ、この婆さん鳥目なんですよ。夜は殆ど見えないらしい。しかし何とか覚えていた」「見えねえのに何を覚えてるんだ」

「体格ですよ。ほら、景影は判るんですよ婆さん。でも。被害者の連れの男は図体が馬鹿でかかったと云うんです。しかも禿頭だった」

「禿か。年寄りなのか」

「いいえ。若かったそうで。その話を鵜呑みにすれば、六尺を越える剃髪の大男です。坊主ですかね」

「ここは箱根じゃねえよ」

木場がそう云うと青木はああ、あつちはどうなっていますかねえと心配そうに云った。

現在、箱根山連続僧侶殺害事件と云うのが世間を騒がせている。二月の初め頃から次々と僧侶が殺害されて、犯人も僧侶だとかいや違うとか、皆目解決する気配がない。風の便りに聞くと、これにどうも木場の知人友人が巻き込まれて難儀していると云うことだった。

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。